様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０３８

研究課題名（和文）死を歌う：小アジア西部出土のギリシア語韻文墓碑銘における死・感情・感情戦略

研究課題名（英文）Singing death: Death, emotion and emotion strategy described in Greek verse funerary inscriptions from western Asia Minor

研究代表者
藤井　崇（FUJII, Takashi）

京都大学・白眉センター・助教

研究者番号：５０７０８６８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、紀元前６世紀から紀元４世紀までの小アジア西部から出土した韻文のギリシア語墓碑銘を調査し、ギリシア人が個々の死のプロセスや死因（病死、戦死、産褥死など）にたいしてあらわした感情（悲しみ、怒り、誇り、喜びなど）と、その感情を表現する際に用いた戦略を明らかにすることを目的とした。具体的な手順としては、まず小アジア出土の韻文銘文を網羅した Steinepigramme aus dem griechischen Osten を分析し、データベースを作成した。次に、このデータベースから死のプロセスを詳細に描いた銘文を抜き出し、ヘレニズム期・ローマ帝政期の社会・政治状況との関連を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project was to examine emotional responses to the various types of death as described in Greek inscriptions from western Asia Minor, from the sixth century BCE to the fourth century CE. Focusing on dynamic relationships between an individual type of death, a specific rhetoric to describe it, and an emotion that the type and rhetoric evoke, I attempted to shed fresh light on the Greek form of emotional communication between the donors of inscriptions and their audiences, including strategies and manipulations controlling the expression of emotions. The results of this project divide into two stages. In the first stage, I compiled a database of deaths and related emotions, surveying the Steinepigramme aus dem griechischen Osten. In the second stage, those inscriptions that contain detailed information on the processes of dying were dealt with, especially in terms of their relevance to the social and political history of the Hellenistic and Roman East.

研究分野：ヘレニズム時代とローマ帝政期の歴史、ギリシア語銘文学

キーワード：ヘレニズム　ギリシア　ローマ　死生学　銘文学

１．研究開始当初の背景

本研究の背景をなす学問分野は、死生学と感情研究で、ともに比較的新しい学問分野である。

（１）死生学：人類にとって死は不可避である。しかしこの事実は、死因やそのプロセスの描写、残された家族・友人の反応が、古代から現代まで変化しなかったことを意味するものではない。その意味で、死は社会的・文化的背景によってその認知が左右される、歴史的存在である。西欧における死の観念の変遷を１０００年のスパンで描いた Ariès の記念碑的著作（1977: *L'homme devant la mort*）以降、歴史家は死の意味や表象、宗教および科学との関係、それらの時代の価値観との連動、すなわち「死生学」、を考察の対象としてきた。さらに医学の発達によってもたらされた尊厳死、再生医療などの問題の出現は、死（とそれを回避しようとする医療）が、個人と社会の倫理と価値観と深く関係する人文学的対象であることを明らかにしている（島薗その他 2008:『死生学』）。古代ギリシア人の死に関する研究はこれまでも多くなされてきたが、多くの研究者は死生学のなかでも特に死後の観念と死の政治的側面に注目してきた。代表的な研究者として、前者に関しては、ホメロスの時代（前８世紀）から古典期（前５世紀）までの死後の観念の変遷を扱った Sourvinou-Inwood（1995: *'Reading' Greek Death*）、後者に関しては、死とポリス（ギリシア的都市国家）成立の関係を考察した Morris（1987: *Burial and Ancient Society*）、死とギリシア民主政理念との関係を描いた Bergemann（1997: *Demos und Thanatos*）が、それぞれあげられるだろう。

（２）感情研究：人間が抱く諸感情は人類の生得的基盤であり時代・文化に関わらず不変であるという説（心理学者ポール・エクマンなど）にたいし、一部の心理学者や歴史家は近年その文化依存性を強調している。すなわち、悲しみ、怒りなどの感情自体は人類に普遍的であるとしても、そのダイナミズムや表出方法はそれぞれの文化や時代に応じて様々な形態をとりうると考えるのである。後者の見方にたつ古代史家としては、Harris（2001: *Restraining Rage in Classical Antiquity*）、Konstan（2006: *The Emotions of the Ancient Greeks*）、Chaniotis（2012: *Unveiling Emotions*）などがあげられる。特に本研究に関わる死にまつわる感情についても、それが文化的偏差のない人類共通のものであるとする見解と、社会的・文化的相違に基づく歴史的産物であるとする見解とが対立しているが（Hopkins 1983: *Death and Renewal*）、本研究は後者の立場にたつ。悲しみや苦しみは確かに人類共通の死の感情であろうが、死にまつわる感情は歴史的にそれらに限定されるものではないし、さらに感情が表出されるメディア、個人の感情が社会に共有される程度は、時代々々で様々であると考えられるからである。ギリシア人の死の感情に触れた研究として、Vérilhac（1978-82: *Poésie funéraire*）や Tsagalis（2008: *Inscribing Sorrow*）があげられる。

２．研究の目的

本研究は、 紀元前６世紀から紀元４世紀までの小アジア西部から出土した韻文のギリシア語墓碑銘を調査し、ギリシア人（ギリシア語話者と定義する）が個々の死のプロセス・死因（病死、戦死、産褥死、「たたり」による死など）にたいしてあらわした感情（悲しみ、怒り、誇り、喜びなど）と、その感情を表現する際に用いた戦略を明らかにすることを目的とする。死のプロセス、それを表現する戦略、その戦略によって喧伝される感情、この三者のダイナミズムを分析することで、本研究は、古代ギリシア世界における死にまつわる感情表現の社会的、思想的、文化的、宗教的背景を照らし出し、死と感情のギリシア的特殊性ならびにその時間的・地理的多様性を析出する。１０００を超える豊富な銘文史料を死のプロセスと感情という視角から考察する本研究は、古代ギリシアの死生学研究と感情研究とを統合する、国内外に類をみない独創的な研究である。

３．研究の方法

（１）死のプロセスのデータベース化：本研究の主要史料は、小アジア出土のギリシア語の韻文銘文（大半は墓碑銘）を網羅的に収録した *Steinepigramme aus dem griechischen Osten*（ed. Merkelbach and Stauber 1998-2004, 5 vols. 以下 *SGO* と略記）である。本研究は、まず *SGO* に収録されている墓碑銘を抜き出し、その後そこに表現されている死因・死のプロセスをもとにデータベースを作成する。これまでの予備的調査によると、フリュギア地方だけで約２００の韻文墓碑銘が確認され、そのうち１３０ほどの銘文から死因・死のプロセスを読み取ることができた。その他の小アジア西部地域をあわせると、全体で約１０００から１５００の韻文墓碑銘が研究対象となることが予想される。データベース化で注目する事項は以下の通りである。１）銘文発見の場所、２）推定年代、３）死者、４）銘文奉献者、５）死因・死のプロセス、６）関係する感情と表現方法（感情戦略）、７）銘文が刻まれたモニュメントの種類（石碑、門柱型の墓碑など）とレリーフがあればその内容。項目５の死因・死のプロセスは、以下の６種に分類する。１）病死（幼年死を含む）、２）老衰、３）戦死、４）事故死、５）いわゆる「たたり」による死、６）その

他（殺人、自殺など）。*SGO* の編集時期が比較的最近であるため、ここに未収録の墓碑は少ないと予想しているが、万全を期すために、ギリシア語銘文の年報（*Supplementum Epigraphicum Graecum* の電子版）の体系的なチェックを通じて、*SGO* の内容を補っていきたい。

（２）死のプロセス・レトリック・感情：次に本研究は死のプロセス・レトリック・感情という三者間のダイナミズムを追求する。奉献者が墓碑で感情を刻み喧伝した理由はいくつか考えられる。例えば、死者をなだめ死の穢れを防ぐため、自らを慰めるため、より大きな「感情コミュニティ」に感情を共有してもらうため、隣接の他の墓碑との競争心から、等々である。具体的には、上記（１）であげた６種の死のプロセスそれぞれについて分析を進めていくが、中でも特に死のプロセスを詳細に描写した銘文に注目する。ヘレニズム期から古代末期にいたる（おおよそ紀元前４世紀から紀元５世紀まで）ギリシア本土・島嶼部と小アジアから出土したギリシア語墓碑銘が、主たる研究の素材である。これらの墓碑銘のなかから、死のプロセス、つまり生から死への移行（例えば病気の進行や戦死の詳しい状況など）が詳細に描写されているものを抽出し、それらをレトリックの形態、当時の社会状況との関係、時代の変遷などの観点から考察し、最終的にそこで表現されている感情の死生学的、修辞学的、社会的背景を明らかにする。さらに、この研究の成果を大きな研究の文脈に位置づけ、国際的に発信するために、平成２６年度９月に京都で国際会議を開催することを計画する。

４．研究成果

（１）平成２５年度の研究成果：本年度は、小アジア出土のギリシア語韻文銘文（大半は墓碑銘）を網羅的に収録した *Steinepigramme aus dem griechischen Osten*（上述）を分析した。具体的には、まず本史料集に収録されている墓碑銘を抜き出し、そこに表現されている死因・死のプロセスに注目しながら、１）銘文発見の場所、２）推定年代、３）死者、４）銘文奉献者、５）死因・死のプロセス、６）関係する感情、７）レトリック、８）銘文が刻まれたモニュメント、の観点からデータベースを作成した。また、今年度科研費の繰越分で、２０１４年７月から８月にかけて、オクスフォード大学（イギリス）での資料調査ならびにアフロディシアス遺跡（トルコ）での現地調査をおこなった。

（２）平成２６年度の研究成果：本年度は、昨年度の研究成果を受けて、まずギリシア語墓碑銘のデータベースにたいし特に死のプロセスとレトリックという観点から分析を加えた。主にヘレニズム時代からローマ帝政期にかけて小アジアと一部ギリシア本土・島嶼部に建立された数点の墓碑銘は、詳細な死のプロセス（病気の進行、手術の様子、殺人の経過、戦死の状況など）を描いている。本研究は、これらの韻文墓碑銘の知的背景として当時の一般社会の医学知識と歴史記述のトレンドを想定し、その上で死者から取り残された家族と社会が死をどのように受け止めたのかを、同時代の社会・政治状況との関連から明らかにした。この研究の成果の一部を、本年度９月に京都で開催された国際会議で報告し、国内外の参加者からフィードバックを得た。また、本研究の背景となる広義の宗教事情に関係する研究報告を、アテネ（ギリシア）で開催された国際会議と東京で開催された国内学会で報告した。これらはそれぞれ、ローマ帝国東方属州における支配者崇拝と在地の宗教体系との関係、ローマ帝政期の伝統宗教における新機軸に関する報告である。さらに、在アテネの British School at Athens で資料調査をおこなった。

（３）今後の展望：今回の科研費の研究期間中に、小アジア出土の韻文墓碑銘を概観して主要な対象地域に関してデータベースを作成し、それを死のプロセスという観点から分析することができたのは、大きな成果である。今後の研究では、このデータベースをさらに活用しながら、特にヘレニズム期・ローマ帝政期の墓碑銘を分析した上で、墓碑銘に利用されたレトリック、家族と共同体の記憶としての墓碑銘、墓碑銘と墓碑芸術との関係などのポイントを深めていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計３件）

１．Takashi Fujii, Emperor, Sanctuary and Myth in Roman Cyprus, *The Third Euro-Japanese Colloquium in Ancient Mediterranean World: Myth, Sanctuary, and Historiography*, 25 April 2014, British School at Athens (Greece).

２．藤井崇、「ローマ帝国東方地域における聖域と社会」、日本西洋史学会第６４回大会、２０１４年６月１日、立教大学（東京都）。

３．Takashi Fujii, The Processes of Dying in Greek Funerary Inscriptions: Intellectual Contexts and Social Roles, *The Processes of Dying in the Ancient Greek World*, 2 September 2014, Kansai Seminar House (Kyoto).

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
藤井　崇（FUJII, Takashi）
京都大学・白眉センター・特定助教

研究者番号：50708683

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：